

『ヴィレット』試論

—ヒロインの自己発見に見るシャーロット・ブロンテの模索—

香山はるの

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の晩年の傑作、『ヴィレット』(Villette 1852)の世界では、愛を渴望するヒロイン、ルーシー・スノウ (Lucy Snowe) の葛藤、そして「人生の傍観者」(211)である彼女の苦悩やある種の諦念が、憂いを帯びた暗い色調を醸し出している。¹ この暗さに、作家ブロンテ自身の伝記的事実が影を落としているという指摘がしばしばなされてきたことは、周知の通りである。1848-49年に最愛の弟や妹たち(ブランウェル、エミリー、アン)を相次いで亡くしたシャーロットは、父パトリックとの閉鎖的な生活の中、自らの健康に対する不安や遣る瀬ない孤独に苛まされ、精神的に不安定な日々を送っていた (Gordon, 184-87)。さらにこの小説の舞台であるヴィレットという町には、シャーロット自身の苦い青春時代の思い出—ブリュッセル滞在中に抱いたコンスタンタン・エジェ氏に対する思慕や、この実らぬ恋が引き起こした激しい苦悶と絶望などが投影されているとも言われている (Duthe, 20-60)。実際、小説のプロットを見ても、ヒロインの精神的な自立が最終的に結婚という幸福に結びつく『ジェーン・エア』(Jane Eyre, 1848)の樂觀性はもはや見られない。確かにブロンテは『ヴィレット』において『ジェーン・エア』の場合と同様に、美貌、社会的地位、財産等の特権を持たぬヒロインを扱ってはいるが、ルーシーは異国における外国人という立場から、ジェーンよりもさらにマージナルな、抑圧された存在といえよう。そして、自分の居場所を求めて積極的に行動するジェーンとは異なり、ルーシーは消極的な気質のため、自分から変化をあまり求めようとしないところがあるので、その成長過程も—特に小説の前半においては—滑らかな直線を描くものではない (Chase, 68)。さらに、こうしたルーシーがようやく愛を得、同時にささやかな野心、独立心に目覚めたとき、ブロンテが彼女に安定した、幸せ溢れる未来を約束できなかったことは注目に値する。後に見ていくように、この作品の結末では「自立」

と「愛」という、ブロンテがしばしば問題にしてきた関係に、明白な決着がつけられていないのである。こうした点に作者の内面的な変化、厳しい現実認識、あるいは抑えがたい心の揺れを認めることができるのではないか。本稿では主人公ルーシー・スノウに焦点を当て、彼女が異国の地、ヴィレットにおいて自己を発見していくさまを、人種、ジェンダー、階級といった問題と絡めながら、分析していきたい。そこから見えてくるものは、一見作品の表面に描かれているものよりもラディカルであり (Shuttleworth, 232)、女性作家として円熟期を迎えたブロンテのさらなる模索、彼女が示した新たな方向性であると信じる。

この小説においてブロンテはこれまで以上に、人種やジェンダー、階級をめぐる力関係を意識し、それらの複雑な関係を、頼るべき友無きイギリス人女性、ルーシーを中心に探っている。ラバスクールの子寄宿学校の経営者、ベック夫人 (Modeste Maria Beck) は、初めてルーシーに出会ったとき、ただ一人で海峡を越え、将来について確固たる展望も持たずに異国の世界に飛び込んできた彼女の行為に幾分呆れながらも、「イギリス人の女だけよ、こんなことをするのは……なんて大胆なんでしょう」² (127) と感嘆する。確かに言葉、文化、宗教の異なるこの地で、とりたてて生計を立てる能力もなく、しかも「保護者」となるような男性を引き付ける身分や財産、美などを備えていないルーシーにとって、ラバスクール行きは冒険であったといえよう。それはイギリスに「家」を持たないこのヒロインが、精神的に追い詰められ決意したことであるが、ルーシーは自分に居場所を与えてくれなかったイギリスに怨恨を抱いてはおらず、むしろ、この異郷に足を踏み入れたときから、イギリス人であることを誇りを持って強く意識していくのである。これはヴィレット到着後に、彼女を執拗に追い回すいかがわしい男二人を含む、ラバスクール人全般の描写に明らかに示唆されている。

たとえば、ジョージア・ダンバー (Georgia S. Dunbar) が「ブロンテのベルギー、ベルギー人、フランス人、ローマ・カトリック主義に対する嫌悪は小説中の侮蔑に満ちた多くの表現に表れており、彼女が選ぶ地名や姓名に凝縮されている」(78) と述べているように、『ヴィレット』の読者は、数々の象徴的、暗示的なネーミングに気付く。ル

ルーシーは6章で「ラバスクール大王国の偉大なる首都ヴィレット」と口にするが、その表現にこめられた皮肉は「ラバスクール」、「ヴィレット」がそれぞれ「農家の庭」(‘farmyard’)、「卑小な町」(‘little town’)という意味を持つことにより、一層際立つ (Dunbar, 78)。またダンバーによれば、ベック夫人の学校のあるフォセット通り (Rue Fossette) は ‘little ditch’、すなわち「小さな溝・どぶ」という意味であるという (78)。

こうした地名に加え、ルーシーが会合するラバスクール人の名前、さらには彼らの性質もしばしば風刺的に描かれている。たとえば、経営者として「監視」と「スパイ行為」により、学校の表面的な秩序を保つベック夫人の名前が、女性らしい「慎ましき」と「敬虔さ」を表す ‘Modeste Maria’ というのはいかにも皮肉である。またより直接的な風刺として、欲の深い利己的なワルラヴアン夫人 (Walraven) の名前が「カラス虐殺」(‘walraven’) と解釈できることも、この「魔女」のような老婆が、自らの強欲により、孫のジュスティヌ・マリ (Justine Marie) を悲嘆に陥れ、死に追いやったという事実を考えると興味深い (Dunbar, 79)。そしてルーシーは、こういった名前を持つラバスクール人に共通して見られる卑俗性—彼らの愚鈍さや偽善ぶりなど—を痛烈に批判する。「あらゆる人に公正に言うならば、生粋のラバスクール女にも特有の偽善性があった……いつでも、嘘が必要な場合には彼女たちは良心の咎めなどまったく感じずに、いともやすやすと嘘をついた。ベック夫人の学校では、台所で下働きをする者から校長自身に至るまで、嘘をつくことを恥じる者は一人もいなかった」(145)。実際、ルーシーの同僚である女性教員は、ほぼ皆 (身持ちの悪そうな浪費家の「パリ女」も含めて) 墮落した「外国人」としてネガティブに描写されている。そして、それと対置して描かれるのが「懐かしきイギリス」の美德、道徳的優越だということは想像に難くない。これを代表するのが、ブレトン家 (‘Bretton of Bretton’) である。³ 彼らの家庭は「誠実」、「信頼」、「博愛」等に象徴されるイギリスの伝統的価値に支えられ、穏やかな幸福に満ちている。第一章から早くも示されているように、それはまるで「エデンの園」を思わせるような平和な小世界であった。語り手ルーシーは、自らの少女時代を回想して言う。

ブレトン夫人の家を訪れるのは、クリスチャンとホープフルが「両岸に緑あふれる木々が茂り、一年中美しいユリの花に彩られた牧場」に囲まれた心地よい小川の傍らにしばし留まるのと似ていた。そこには変化の魅力や出来事の興奮といったものはなかったが、私はこよなく平和を愛し、ほとんど刺激を求めないので実際に刺激的なことが起こると煩わしく感じ、そんなものは近寄らないでほしいと思うのだった。(62)

のちに数年の歳月を経て、ルーシーがヴィレットで再びブレトン家—ブレトン夫人 (Louisa Bretton) とその息子ジョン・グレアム・ブレトン (John Graham Bretton) —に出会った時、彼らがこうしたイギリス的な美德を保持し続けていたことに、彼女は強い感銘を受けるのである。実際、青年となったグレアムにルーシーが惹かれ始めるのも、彼の持つ「イギリス性」に囚るところが大きいと思われる。それはグレアムの「きれいな英語」の声 (123)、「イギリス的な顔色や目、姿」(160) に始まり、またイギリス中流階級にしばしば認められるような、彼の騎士的な振る舞いに表れている。7章でルーシーは、無くなったトランクについて馱馬車の車掌に問い合せてくれ、また宿を紹介してくれたばかりか、夜道を送ってくれたこの親切な同国人⁴に、ノスタルジアを伴った、感謝の気持ちを強く抱く。その夜のことは、ルーシーの心に深く刻印されたのである。「友無き孤独な者に対する温情の光溢れた彼の顔—若く美しく者に対するのと同様に、貧しく弱い者に対しても義侠心を示す彼の声—こういった記憶は、ずっと後になっても強壯剤のように私の心を元気づけてくれた。彼こそ、正真正銘のイギリスの青年紳士だった」(125)。さらにグレアムの母親、ブレトン夫人についても、ルーシーは「地味な服装をしているけれども立派で、常に見栄を張らない、生れつき落ち着きと陽気さを備えている、イギリス中産階級の淑女」(295) と敬意を示している。ヴィレットにおいてもブレトン夫人の居間は以前と同じように、温かい炉辺やゆらゆらとした琥珀色のランプの光、イングリッシュ・ティーの用意—どっしりした銀の湯沸かしや薄い陶器のセット、懐かしいシードケーキ—そして真の愛情と信頼に基づく人々の会話や笑い声など、「心地よい家庭的な雰囲気」(245) で漲っている。そこでは物質的豊かさとともに、偽善的で

空虚なベック夫人の世界には無縁の、たしかな人間の絆を感じる事ができるのである。それはある意味で、社会的に零落したルーシーが閉め出された世界であったが、それゆえ彼女がより一層固執し、回復したいと強く願ったものでもあったろう。

しかし、『教授』や『ジェーン・エア』でも見られた「健全な素晴らしいイギリス」と「邪悪な外国」といった単純な構造は、この小説では最終的に崩される。⁵別の言い方をすれば、ルーシーはヴィレットで一人、自分の置かれた環境に立ち向かう中で、偏見を次第に和らげ、狭量な島国根性から離れて、より広い視野から物事を見られるようになっていったのである。

その大きなきっかけとなるのが、ルーシーがブレトン母子に、裕福な支配階級に特有の傲慢な無神経さ、「他者」の痛みや苦しみに対する根本的な無理解を認めたことである。23章でポーリーナ (Paulina Mary Home de Bassompierre) が再び姿を現すと、ブレトン家の人たちの関心はすべて彼女に集中してしまい、7週間もの間ルーシーはただ一度の便りも訪問もされずに、放っておかれる。ヴィレットで他に親しい友人を持たない孤独なルーシー、グレアムからの手紙を生命を支える糧、「天の賜物」(318)のように、待ち焦がれるルーシーにとって、この空白は拷問にかけられるような苦悶の期間であった。こうしたルーシーの心の深淵をブレトン母子は想像することも、ましてや共感することなどできなかったのである。ある朝、ようやく「高台」(La Terrasse) から一通の手紙が来る。差出人はブレトン夫人であるが、その内容は彼女の自己満足的なエゴイズムを、ルーシーそして読者に痛感させる (Newton, 117-8)。「親愛なるルーシー この1、2ヵ月の間、あなたがいかがお過ごしだったか、ふとお尋ねしたい気持ちになりました……おそらくあなたも〈高台〉の私達と同じように、お忙しく楽しく過ごされていることでしょう」(354)。この後もブレトン夫人は、息子のグレアムに対する自分の溺愛を綿々と綴り、ルーシー自身に関心を向けることはない。

そしてこのような配慮のなさ、感受性の欠如は息子のグレアム・ブレトンにさらに強烈に表れている。たとえば22章で、グレアムは屋根裏で、自分が書いたルーシーへの手紙を見つけポケットに隠して、彼女が涙を浮かべてそれを探すのをひやかし気味に眺めている。ルーシーの自

分に寄せる思いに盲目なグレアムは、その上残酷にも、ジネルヴァ・ファンショー (Ginerva Fanshawe) やポーリーナに対する恋の悩みのはけ口をルーシーに求め、彼女をまるでジネルヴァやポーリーナの「保護者」、或いは自らの「恋の仲介者」のように扱おうとする。これらのことからわかることは、グレアムの自己中心性であり、またルーシーを単なる「無害な影」(403) と見做し、友人として対等の立場で、彼女の気持ちを配慮しようとはしない彼の姿勢である。ルーシーはこれをグレアムの「階級意識」や「ブルジョア的な実利主義」(Newton, 115) に帰している。

ああ、グレアム！ 私は一人でいるとき幾度となく、あなたがルーシー・スノウをどのように評価しているか考えたり、推測してみた。あなたの評価はいつも親切で公正なものだったのか。もしルーシーが本質的に変わらないまま、ただ財産と地位といった利点をそのほかに持ち合わせていたら、彼女に対するあなたの態度や評価は今とまったく同じだったろうか。(401)

そして、こうした社会的にアンバランスな二人の力関係は、グレアムが医者であるという事実によって、さらに強化される。ルーシーの神経衰弱や彼女を悩ます「修道女」(‘nun’) の姿に対して、グレアムは医師・専門家として「陽気な交際」(257)、「幸福」や「愉快的な気持ち」(339) など、きわめて月並みで慣習的なアドバイスしかできない。こういった「治療法」がルーシーのような抑圧された環境にいる者にとって、いかに的外れで意味のない忠告であるか、ここで説明する必要はないであろう。グレアムの見方は幸運に恵まれたいわゆる「強者」の論理であり、またそこには、シャトルワースが示唆するように、女性の経験を定義づけて統制しようとする、当時の精神医学の男性的なシステムが認められる(220-22)。実のところ、グレアムはルーシーの内面に秘められた苦悩など、知りたいとも思っていないのである。

こういったグレアムが「ワシテ」の表現する激情、炎のような憤りを理解せず、家父長制に反逆する「墮ちた女」という烙印を押して彼女を片付けてしまうのも (Jacobus, 47) 驚くには当たらない。彼は、女性のあるべき姿・ふさわしい行動といった規範を越えて一すなわち芸

術家として一彼女を評価することはできなかつたのである。⁷「紳士」グレームが理想とするのは、自己を抑制する術をわきまえ、かつセクシュアリティとは一見無縁の、「妖精」のようなポーリーナであり、彼の男性としての喜びは、17歳になったポーリーナがいまだに舌のもつれた発音をして赤面するときには最高潮に達する (Newton, 116)。小説の前半で既に、ルーシーは幼いポーリーナとグレームの間に、親愛という名のもとに生まれ増強されていった、アンバランスなジェンダーの力関係を見抜いていた。たとえば3章「遊び仲間」では、少年グレームは「ポーリー」にとって「トルコ皇帝 (the Grand Turk) 以上の存在」(82) であり、後者は彼に寄り添い従う「小さな妾 (little Odalisque)」である (87) といった暗示的な比喩が使われている。実際この数年後に、ポーリーナは最愛の父親から新たな「保護者」グレームへ手渡されることになるが⁸、ルーシーはポーリーナに好意を抱いており、彼女とグレームの幸せを祝福はするものの、この二人の間にある主従関係、力の不均衡に対しては、ある種の反感を禁じえない。一例を挙げるならばそれは、ルーシーが力一杯尻尾を振って主人の回りを跳ね回る小さなスパニエルを見て、「この上なく完璧な」(518) グレームに仕えるポーリーナを思わず連想した、というエピソード (36章) に微妙に表れていると思われる。

こうしてストーリーが進むにつれ、ブレトン家が持つブルジョア的な利己心や冷酷な無感覚、家父長制度に支えられた保守的で不平等なジェンダー・イデオロギー⁹が露呈されることによって、彼らの象徴する「イギリス性」は無条件に称揚されるものではなくなっていく。換言するならば、ルーシーは彼らの世界に魅了されながらも、その規範におさまらぬ、いわば違和感を感じている自分に気付いたのである。

このようなヒロインのアンビヴァレントな感情は、小説中様々な状況において見受けられる。たとえば、「自立」という問題は『ヴィレット』における重要な一つのテーマと考えられるが、これに対するルーシーの態度は複雑である。特に小説の前半、ルーシーが自らの生活に思いを馳せ、しばしば激しい苦悩や絶望感に苛まれるのは、ある意味で彼女が、ただ一人で人生との戦いに臨まなければならないという半ば諦めを交えた決意と、愛に対する一種の飢餓感一愛され、また愛する人のために生きたいという強い欲求一の間で激しく揺れ動くためと思われる。ハリエ

ット・マーティノー (Harriet Martineau) は、『ヴィレット』について、「女性キャラクターは皆、頭の中も生活も愛のことだけ」(Allott, 172)と酷評しているが、これはヒロインの内に潜む分裂や葛藤を無視した一面的な見方であるのではないか。

たとえば、ルーシーが、グレアムに対する空しい恋心を葬り去り、またそれに伴うようにして、他人が押しつける「おとなしい、影のようなルーシー・スノウ」といった「偽りの役割」(403-4)を拒否し、あらためて自分のアイデンティティーを模索する過程は重要である。26章でルーシーがポーリーナの「お相手役」(‘companion’)になるのを断ったことを思い起こしてみよう。「私は光り輝くレディー、ミス・ド・バゾンピエールの影ではなかった」(382)。この短い言葉には、一人の人間として精神的な独立を求めるルーシーの強い自我が凝縮されている。そして、「自由」を獲得するには経済的な裏付けが不可欠である。つまり、「どうすれば少しでも地位を上げ、独立した立場に向けてもう一步踏み出すことができるだろうか」(450)というのが、次の問題であった。こうして彼女は、ささやかでも自分用の教壇がある学校を経営したいという望みを抱く。実際、ベック夫人の寄宿学校においてもルーシーは、モートンの村の学校におけるジェーン・エアよりも、教えることに意気込みを示し、またそこから多くの充足感も得ているように思われる。彼女がたどたどしいフランス語を用いて奮闘し、ブランシュ (Blanche)、ヴィルジニー (Virginie)、アンジェリーク (Angelique) に代表される反抗的な生徒たちを抑え付け、やがて彼女達の尊敬や愛情まで勝ち取っていく様子は、この小説の中で最も生き生きと描かれている箇所の一つではないだろうか。「私はただひたすら成功を目指した。人生最初の挑戦において、単なる勝手な不満や気まぐれな反抗に出鼻を挫かれるなんて、我慢できなかった。夜は横になってから何時間も寝付けず、あの暴徒たちを確実に捕らえ、頑固な連中を永久に支配する方策は何か、と頭を悩ましたものだった」(146)。

しかし一方で、この教育・学校経営という「人生の目的」(450)に対する野心と複雑に絡んでくるのが、愛する男性の幸福のために尽くす喜びへの憧れである。将来の夢を描いて勇気を自ら奮い立たせながらも、ルーシーは感じずにはいられない。「……しかし、その後、私は人生でこれ以上のものは望めないのだろうか——本当の家——自分自身よ

りももっと大事なもの—そしてその貴重さゆえに、自分だけのためになら育てる気にならないような立派なものを、私から引き出してくれるようなもの—そういったものは、私には望めないのか。その足元に人間のエゴイズムという重荷を喜んでどさりと捨て、もっと高貴な、他人のために生きるという責任を見事に担う気になれるような存在は、私には得られないのだろうか」(450-51)。このように、彼女は精神的、経済的な意味での独立と家族に愛を注ぐ献身的な生き方の双方に惹かれていたのである。この意味では、「自分自身の心や生活を持たず、誰か他の人の内に生き、存在している」(83) ようなポーリーナほど極端な場合は別としても、ルーシーは夫を支える愛情深い妻のイメージを全面否定してはいないと言える。

そしてここには、女性の自立という問題についての、作者ブロンテ自身のアンビヴァレントな姿勢、気持ちの揺れが微妙に投影されていると思われる。

これまで示唆してきたように、ルーシーのキャリアは、老婦人の話相手に始まり、子守兼家庭教師、教員、そして学校長と—パトリシア・ジョンソン (Patricia E. Johnson) の表現を借りれば—「遅いけれど着実な上昇」(619) を遂げてきた。そして、こうしたルーシーの苦闘とその成果を、作者ブロンテが是認していたことは想像に難くない。実際、1846年1月にブロンテが恩師、マーガレット・ウラー (Margaret Wooler) に宛てた手紙の中で、次のように言っているのは興味深い。「夫や兄弟の援助なしに一生涯、静かに忍耐強く自分の道を切り開いていく未婚の女性より立派な性格の者は、この世にありません」(Wise and Symington, 77)。しかしながら、ここで注意すべきことは、女性のキャリアに関するブロンテの考えは、無条件の敬意といった一面的な見方では捉えきれないという点である。たとえば、ジュディス・ニュートンが『女性・権力・転覆』(1981) の中で論じているように、女性が「経済的な独立」を極端な形で推し進め、「私利追求を生活の中心」にしてしまうことについて、ブロンテは強い反発を抱いていたという(98)。これは端的に言えば、ブロンテが感情的には、「自己犠牲こそ女性の美德」というヴィクトリア朝の支配的なイデオロギーから完全に解放されていないということを示す点で (Newton, 98) 重要である。

さらに、ニュートンも指摘しているように、こうしたブロンテの矛

盾ととれる感情、或いは、彼女の中にある新しい価値観と古い価値観との拮抗が明確に表れているのが、冷徹で合理的な未亡人の女校長、ベック夫人のキャラクターである（100-101）。ベック夫人の有能な仕事ぶり、またその結果彼女が手にしたブルジョア的な安定は、「独立」を目指すルーシーを大いに鼓舞するものであった（101）。「この建物も庭も彼女のお金で買ったもので、全て彼女のものなのだ。彼女には老後の安心のための資産が既にあり、自分の管理下で繁栄する学校がある」（450）。そしてベック夫人は、このような成功を収めるのに必須の条件—男性に依存しない自立心など—精神的な強さを見事に備えていたのである。たとえばベック夫人は、グレアムに対する自分の思いや期待が所詮叶わぬものと悟ったとき、強い自制心を示してショックを耐え抜き、ルーシーそしてブロンテをも一皮肉抜きに—感嘆させる（Newton,102）。「マダムは、弱気な振る舞いもせず、また人から笑われるような態度はまったく取らなかった……彼女には大切な職業—彼女の時間を満たし、気持ちを晴らし、関心を割く実際の仕事があったのだ」（171）。ある意味で、ベック夫人が見せる完璧なまでの自己抑制は、同じくグレアムへの報われぬ愛に傷つくルーシー、夫人と同様に独力で人生を切り開かなければならないルーシーが、自分でも身につけたいと望んでいたものであったろう。¹⁰

しかし結局のところ、ブロンテの側には、この冷静なベック夫人をルーシーのロール・モデルにする意向はなかった。ベック夫人の行動の特徴は（上に挙げた、グレアムとの一件からも推察できるであろうが）、仕事やあらゆる人間関係において、如才無く立ち回りつつも、そこに深くコミットしないことである。すなわち、物事のコアや人の本質など「煩わしい」ものには触れずに、うわべを取り繕い、表面的な優美さを保つことが、彼女の最大の関心事だったと言える。たとえばそれは、ベック夫人は一度も会ったことのない「貧しい人たち」のためには気前よく財布の紐を開くが、個々の貧困者の苦しみには心を動かさなかったという逸話に象徴的に表れている。ブロンテは特に小説の終盤で、このようなベック夫人の感情面での欠落、また、ポール（Paul Emanuel）に関して抜け目なく計略をめぐらす彼女の打算や強欲さを、醜く暴き立てることによって（「彼女は彼を〈我慢ならない〉と言ひ、〈ごりごりの帰依者〉と罵った。彼女は愛してはいなかったが、

彼と結婚したがっていた。彼を自分の利益に縛りつけるために。」(544)、人としての温情を持ち合わせていない彼女の生き方が、いかに空虚で不毛なものであるかを読者に強調している。

このようにブロンテにとって、人との深い心の交流、思いやりや愛を伴わない女性の自己実現は、受け入れ難いものだったのである。作家として常に彼女が関心を寄せていたことは、女性の自立への意志は、他人—特に男性—に対する愛情との関わりにおいて、どのように果たせるのか、すなわち、いかにして両者の間に折り合いをつけるか、ということであった。¹¹ こういったブロンテの問題意識の背後に、ヘレン・モグレン (Helen Moglen) が、ブロンテが育った環境の影響——独立を強く求めながらも、「生き残った者」としての強い罪意識から、パトリックとブランウェルが支配するいわば父権制の世界で、女性として自己犠牲的な役割に甘んじてきたシャーロットの姿——を見出しているのは (19-59) 興味深い。

実際、『ヴィレット』の結末は、これまで見てきたような、ヒロインそして作者の分裂や葛藤に確固たる決着をつけてはいない。このことは主に、ルーシーとポールの関係に表れていると言えよう。41章で読者はルーシーと共に、ポールが彼女のために準備しておいた郊外の綺麗な家 (学校) に案内される。バルコニーでいそいそと「私の王」(587)、ポールにチョコレート、ロール・パンや果物を用意するルーシーは、一見、ポーリーナの後に続き、「家庭の天使」という立場に収まったかと読者に思わせる。そして、二人を取り巻く情景も、まさに「幸せな家庭の団欒」を示唆しているように見えるのである。たとえば、フランス窓の格子は一夫に頼り、依存する妻をイメージさせるような蔓植物で覆われており、家の中には、炉辺、裁縫箱、陶器のコーヒー・セット等が心地よく身を落ち着け、さらには美しいスマイルがこの平和な情景に甘い香りを添えているという。しかし、この小説は「そして二人は結婚し、幸せに暮らしました」という明快な大団円で幕を閉じないのである。ブロンテは、ポールをグアダループへ送り出し、恋人たちの運命を読者の想像に委ねることによって (「ここで休もう… …穏やかで優しい人の心を悩ませまい。明るく想像力を持つ人には希望を残すことにしよう。」(596))、あえて結末をオープンにし、小説のコンヴェンションに背いたのである。

ポール・エマニュエルは、ルーシーの自己探求において決定的な役割を果たす人物である。ケイト・ミレットはポールのことを、「敬虔、因習、男性至上主義、女の〈競争〉に恐れをなす青二才の優越主義ショービニズムの代弁者」(33)とこき下ろしているが、これはかなり不当な評価と思われる。

第一に、彼はこの小説の中で、ルーシーの自立への欲求を積極的に後押しした唯一の人間である。彼はルーシーの内に潜む激しい一面、これまで抑えられてきた熱い感情を見抜き、彼女の心を解き放つ。チェイスが述べているように、ルーシーはしばしば、自発的というよりはむしろ、困難や試練に遭遇した時、それに「反応」する形で成長を遂げてきた(69)。一例を挙げれば、ルーシーはベック夫人に「退却か前進か」と挑まれたとき初めて「自分の気後れを屈辱そのものと感じて」(141)、「前進」—すなわち教壇に立つこと—を決意する。ポールはこのようなルーシーの気質を把握しており、意図的に挑発的な態度を取りルーシーを刺激することで、彼女の変化、成長を促したと言える(Chase, 69)。「あんたは抑えつけなきゃならん、そういう類の人なんだ」(226)。実際、30章で描かれているように、ルーシーが自分の能力をさらに伸ばそうと野心を抱き、勉強に専念するのも、そもそも、ポールの挑戦的な、冷笑混じりのあてこすり(「知性を鼻にかけておく」(440))に抗する形で始まったのである。ポールの悪態は時にルーシーを傷つけ怒らせるが、見方を変えれば、ルーシーを「無色の影」(226)ではなく、一個人として捉え、その内面世界に関心を示したのは彼だけであった。そしてポールによって激しく感情を揺さぶられたルーシーは、ふと気づくのである。「私は今まで、こんな気分が自分の本性の中にあるとは、知らなかった」(591)。

確かにポールとルーシーの関係には、たとえば「男性教師とその女生徒」というような—モグレンの言葉によれば—「不平等」(25)もあったが、そういった力の不均衡も、ルーシーが彼に心を開き率直に意見を言い始めたことで、究極的にはかなり解消されているように思われる。「彼には、いつも服従ばかりするべきではなかった。時には、反抗することも必要だったのだ。じっと立って、彼の目を見上げ、こう言ってやることは正解だった。あなたの要求は理不尽で—あなたの専制的なところは、暴虐と殆ど変わらないと」(438)。そして大切なことは、ルーシーにそうするよう促したのは、頭では「知的な女性」を

「不運な災難」と見做し、「穏やかでおとなしい、受け身の」(443) 女性を理想としている筈の、ポール自身だという点である。実際、ポールとルーシーの関係は、グレアムとポーリーナに見られる、「強者と弱者」、「主人と奴隷」といった「支配／服従」の関係と比べると、かなり対等に近いものである (Mitchell, 76-8)。32章でポーリーナが「好みがとても難しい」グレアムを「満足させる」ように (466)、彼宛ての手紙を三回も苦心して書き直したという話が出てくるが、これとは対照的に、相手の反応に気を遣いすぎることなく何事も率直に話し合えるポールとルーシーは、ミッチェルの言葉を借りれば、「感情的誠実さ」(75) で結ばれているのである。41章で語り手ルーシーは、ポールが自分の毒舌をからかった時のことを懐かしく思い出す。「……確かにその通りだった。私はこの点についても、攻撃できそうな他のどんなことについても、彼を容赦したりはしなかったのだ。高潔な、心の広い、いとしい、欠点だらけの小男よ！ あなたには率直な態度こそがふさわしかった。だから、私はいつもげげげ言っていたのだ」(588-89)。

このように、ルーシーとポールは互いに影響を与え合い、人間的に成長していく。これまで、ルーシーの自己発見に重点を置いて論じてきたが、たとえば、ポールが最終的にルーシーのプロテスタンティズムを受け入れたことは、彼女が自分だけのアイデンティティーを持つ必要性を、ポールがあらためて認識できたという意味で (Platt, 23)、重要である。つまり、ポールはルーシーとの数々の (舌戦を含んだ) 心の触れ合いを通じて、自らのカトリック信仰や理想の女性像など、いわば観念的な束縛から解放され、独立した「主体」(DeLamotte, 251) としての彼女を認め、愛するようになっていくのである。このような観点から見れば、「自己発見」は、決してルーシーの側だけにあったのではないと言える。

ルーシーとポールの結びつきは、前者が患ってきた孤独の苦しみの終結のみならず、いわば、新しい価値観に基づく世界の誕生を、読者に東の間期待させる。一ラバスクールにおいて、ルーシーとポールは共に外国人であり、また、それぞれ経済的な事情によって実質上身分を落としており、社会的には不確定な立場にある。こうした二人は、卑俗なヴィレットや冷淡なイギリスブルジョア階級の価値観を越えた、

独自の世界を築いていくことができるのではないかと。

しかし、この希望は、嵐によるポールの船の難破という事態によって、はかなくも永遠にペンディングとなるのである。ブロンテは二人の幸せな将来の可能性を一種の夢としてかろうじて保持する一方で、もう一つの、そしてより有力と思われる筋書き—すなわち、男によって自己の可能性を開花させた女は、もはや男がいなくても生きていられるほど強くなっていた、という皮肉—を用意しているのだ。たとえば、最終章（'Finis'）において、ポールの愛がルーシーを大きく支え、彼女の学校に繁栄をもたらしたことが示唆される一方で、語り手ルーシーが、次のようにコメントしているのは、非常に興味深い。「エマニュエル氏は3年間いなかった。読者よ、その三年は私の人生で、もっとも幸せな三年間だったのだ。あなたはこの矛盾を馬鹿になさるだろうか？」（593）。モグレンが示唆しているように、このようなルーシーの言葉は、まさに女性の人生における、「独立」と「愛」の両立の困難さを示していると思われる（25）。すなわち、ルーシーが能力を存分に発揮し、自己実現できるのは、ポールが留守の間だけではないかという（Moglen, 25）、ブロンテの疑問である。—ポールとルーシーは精神的には、ほぼ対等の立場で愛し合っていたとはいえ、ポールが帰還した場合も、果たしてこのようなバランスを二人の間に保つことはできるのか、学校の経営は全面的にポールの手に移るのか、彼の指揮のもとで、ルーシーは教え続け、「サラリー」を得るということになるのか—当時の社会において、ルーシーが仕事と家庭という二つの領域から、同じように精神的充足を得ようとした場合、難題が次々と生じてくることは目に見えている。ブロンテは、あえて結末を曖昧にすることで、言うなれば、ルーシーの独立した女性としての「サクセス・ストーリー」と、彼女を孤独から救い出し、心を満たしてくれる「ラヴ・ストーリー」—この双方をぎりぎりの線で保守している（Chase, 84）。この意味では、チェイスも論じているように、ポールはあくまでも「忠実な、不在の恋人」（85）でなければならなかったのである。

以上見てきたように、ブロンテはジェンダーをめぐる社会のイデオロギーを、最終的に転覆はしなかった。また、最後の章における、ポールの死の暗示¹²が悲劇的であることは言うまでもない。しかしながら、『ヴィレット』はある意味で、結婚によって「家父長制」に組み入れら

れなかった女が、ワシテのような怒れる狂女にも、「非存在」(‘none’)を示唆するような自己否定的な「修道女」(‘nun’) ¹³にも、或いは、自らを幽閉し悲しみに浸るマーチモント老婦人のような、過去にしがみついて生きる哀れなヒロインにもならず、たくましく生きていくことを示している点で、意義深いといえよう。そして、ブロンテは、これまで自分自身意識しながらも隠蔽しようとしてきた不安—たとえば、『ジェーン・エア』の中で、バーサ・メイソンという「スケープゴート」や、タイミング良く転がり込んでくる親類からの「遺産」等を使って封じ込めてきたもの—すなわち、女性の自立に対する自らのアンビヴァレントな気持ちを、憚ることなく描き出している。ルーシーは、異国ラバスクールで、最後までアウトサイダーであり続けるであろう。しかしそこには、「卑小な」ヴィレットの世界と、自己満足的なイギリス中産階級のコミュニティーのいずれにも与することなく、むしろその二つを乗り越えようとするルーシー・スノウの意志が感じられるのだ。テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は、この小説—特にその結末—を「妥協的」(72)と見做すが、これまで論じてきたように、ルーシーの「異端的物語」(235)には、自己の抱える矛盾や葛藤を直視した、ブロンテ自身の模索が鮮烈に映し出され、彼女の以前の小説よりも、はるかにラディカルな光を放っているのである。

註

1. 実際、『ヴィレット』の出版当時、ハリエット・マーティノー (Harriet Martineau) は「殆ど堪え難いほど痛ましい」(Allott, 172)とこの作品の底流をなす暗さを示唆し、ネガティブな評価を下している。
2. 本稿における『ヴィレット』からの引用はMark Lilly ed., *Villette* (London: Penguin, 1985) による。訳文は青山誠子訳 (みすず書房, 1995) を参考にさせていただいた。
3. ちなみに、‘Bretton’は‘Britain’に由来するという。Dunbar, 79.
4. この時点では、ルーシーはまだその青年がジョン・グレアムだということに気づいていない。
5. Cannon Schmittは異なる視点から、「イギリス」と「ラバスクール」は、単純な二項対立では捉えられないことを強調している。*Alien Nation*, 76-106.

6. 以下の批評家はワシテに、ルーシーの抑圧された、破壊的な激情を見出だしている。Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (423-25), Mary Jacobus, "The Buried Letter: Feminism and Romanticism in *Villette*" (45), Brenda R. Silver, "The Reflecting Reader in *Villette*" (109) .
7. 芸術における女性の自己表現の困難ということでは、たとえば、William Makepeace Thackerayが、「二人の男性に同時に恋する」ルーシーをそのままブロンテ自身に重ね合わせて、『ヴィレット』を酷評したことを思い出させる。Allott, 197-198.
8. 「家庭の天使」としてのポーリーナの役割は、彼女の名字が「ホーム」(Home) であることに象徴されている。
9. ミレット (Kate Millett) が言うように、これには息子を盲目的に崇拜する「男性優越主義の」(34) プレトン夫人も間接的にはあるが、加担していると考えられる。
10. たとえば、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) はベック夫人はルーシーにとっては、「抑圧者であるが、同時にまた、彼女自身が身につけたいと願っている冷ややかで合理的な力の権化でもある」(66) と論じている。さらに、グレアムとの関連では、サンドラ・ギルバートとスーザン・ゲーバーが、グレアムへの失恋に耐えるベック夫人を称賛することで、ルーシーは実は、自分自身にある、自己抑制しようという意志や自己を規制したいという衝動を讀んでいるのだ (409) と指摘している。
11. この問題に関してはヘレン・モグレン (Helen Moglen) やジュデイス・ニュートン (Judith Lowder Newton) が、それぞれ *Charlotte Brontë: The Self Conceived*, 214-29, *Women, Power, and Subversion*, 95-124 で詳しく論じている。
12. ブロンテが、ハッピー・エンディングを切望していた父親パトリックの気持ちを汲み、結末をほかしたということは一般によく知られているが、事実上ポールを死なせていることに変わりはない。ジョゼフ・リトヴァック (Joseph Litvak) は、この点について、ブロンテは父親の意向に従うふりをして、実は父親に背き、ポールという「王殺し」だけでなく「父殺し」までやってのけた (489) と、興味深い説明をしている。
13. 「生き埋めになった修道女」が (ポールの愛を得る前の) 抑圧されたルーシーの未来を暗示しているという議論は、多くの批評家によってこれまでなされてきた。たとえば、Moglenの *Charlotte Brontë* (20), Sandra GilbertとSusan Gubarの *The Madwoman in the Attic* (425-26) を参照されたい。

引用文献

- Allott, Miriam. *The Brontës: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1974.
- Brontë, Charlotte. *Villette*. London: Penguin, 1985.
- Chase, Karen. *Eros and Psyche: The Representation of Personality in Charlotte Brontë, Charles Dickens, George Eliot*. London: Methuen, 1984.
- DeLamotte, Eugenia C. *Perils of the Night: A Feminist Study of Nineteenth-Century Gothic*. New York: Oxford UP, 1990.
- Dunbar, Georgia S., "Proper Names in *Villette*." *Nineteenth-Century Fiction* 15 (1960) : 77-80.
- Duthe, Enid L. *The Foreign Vision of Charlotte Brontë*. London: Macmillan, 1975.
- Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. London: Macmillan, 1975.
- Gilbert, Sandra, and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP.
- Gordon, Lyndall. *Charlotte Brontë: A Passionate Life*. London: Vintage, 1995.
- Jacobus, Mary. "The Buried Letter: Feminism and Romanticism in *Villette*." *Women Writing and Writing About Women*. Ed. Mary Jacobus. New York: Columbia UP, 1979. 42-60.
- Johnson, Patricia E. "'This Heretic Narrative': The Strategy of the Split Narrative in Charlotte Brontë's *Villette*." *Studies in English Literature* 30 (1990) : 617-631.
- Litvak, Joseph. "Charlotte Brontë and the Scene of Instruction: Authority and Subversion in *Villette*." *Nineteenth-Century Literature* 42 (1987-88) : 467-489.
- Millett, Kate. "Sexual Politics in *Villette*." *Villette*. Ed. Pauline Nestor. London: Macmillan, 1992. 32-41.
- Mitchell, Judith. *The Stone and the Scorpion: The Female Subject of Desire in the Novels of Charlotte Brontë, George Eliot, and Thomas Hardy*. Connecticut: Greenwood, 1994.
- Moglen, Helen. *Charlotte Brontë: The Self Conceived*. New York: Norton, 1976.
- Newton, Judith Lowder. *Women, Power, and Subversion: Social Strategies in British Fiction, 1778-1860*. New York: Methuen, 1981.
- Platt, Carolyn. "How Feminist Is *Villette*?" *Women and Literature* 3 (1975) : 16-27.
- Schmitt, Cannon. *Alien Nation: Nineteenth-Century Gothic Fictions and*

- English Nationality*. Philadelphia: U of Pennsylvania Press, 1997.
- Shuttleworth, Sally. *Charlotte Brontë and Victorian Psychology*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Silver, Brenda R. "The Reflecting Reader in *Villette*." *The Voyage In: Fictions of Female Development*. Ed. Elizabeth Abel, Marianne Hirsch and Elizabeth Langland. Hanover and London: UP of New England, 1983.
- Wise, Thomas J., and J. A. Symington, eds. *The Brontës, Their Lives, Friendships, and Correspondence*. Vol. II. Philadelphia: Porcupine Press, 1980.